

会計の写実性と言語ゲーム

OSHITA, Yuji / 大下, 勇二

(出版者 / Publisher)

法政大学経営学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経営志林 / The Hosei journal of business

(巻 / Volume)

26

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

100

(発行年 / Year)

1990-01-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003334>

〔論文〕

会計の写実性と言語ゲーム

大 下 勇 二

1. はじめに

本誌第25巻第4号(1989年1月)「会計と言語ゲーム」において、後期ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論を展開して会計の意味論的リアリズムあるいは写像理論的考え方の誤りを指摘した。すなわち、会計が一種の言語ゲームであり、必ずしも経済活動の客観的、忠実かつ正確な写像プロセスではないこと、そして会計プロセスのインプットたる経済活動とアウトプットたる財務諸表との間には本質的に多様な関係を見いだすことができることである。従って、そこでは会計プロセスを本質的に主体的な構造化プロセスとみる。

しかし前稿はあくまでも会計に対する筆者の基本的考え方を一般的な形で提示するにとどまっている。そこで本稿では、ことばの意味に関する言語ゲームの考え方にに基づき上記の点についてさらにもう一步踏み込んで検討してみたい。

まず、会計の意味論的リアリズムあるいは写像理論的考え方の成立する基盤について検討する。すなわち、それが会計上のことばの「写実的描写性」(常識的言語観)を基礎としていること、さらにこの写実的描写性は抽象作用に基づく概念としての意味ということばの意味の一定の捉え方を根拠としていることを明らかにする。

次に、抽象作用に基づく概念としての意味の再検討を通じて、会計の意味論的リアリズムあるいは写像理論的考え方の成立基盤の問題点を指摘する。すなわち、抽象作用に基づく考え方ではことばの概念自体の形成・再構成過程をうまく説明できないことである。そのことによって、ことばの意味が抽象作用により対象から生ずるという考え方を基盤とする「写実的描写性」に十分な根拠がないことを明らかにする。

最後に、会計の意味論的リアリズムの成立基盤の問題点さらには会計上のことばの意味を、言語ゲーム論における意味の捉え方に基づいて再検討し、会計の意味論的リアリズムが必ずしも現実を適切に表現したものではないことを指摘する。

2. 会計の意味論的リアリズムの成立基盤

(1) 会計上のことばの写実的描写性

本稿でいう「会計の意味論的リアリズム」とは、「会計は経済活動を財務諸表にありのままに写像する」あるいは、「会計はカメラで風景を撮るがごとく経済活動を財務諸表に忠実かつ客観的に描写する」という表現に見られるように、会計プロセスのインプットである経済活動とアウトプットである財務諸表との関係を写像関係と見る考え方である。つまり、両者の関係を単純かつ直接的関係と捉える。この考え方は、会計研究者の間で常識的に受け入れられており、我々は前稿で「会計の写像理論的考え方」と呼んだ⁽¹⁾。また、会計の意味論的リアリズムの立場をとれば、客観的に存在すると考える会計の対象をいかにありのままに財務諸表上写像(mapping)するかが会計研究の主要課題となる⁽²⁾。

そこで、まず、会計の意味論的リアリズムの成立する基盤について検討してみよう。会計の意味論的リアリズムあるいは写像理論的考え方の基礎には、われわれの常識的な言語観が存在していると考えられる。つまり、日常のことばを始めとして会計上のことばは現実を写実的に描写している、という考え方である⁽³⁾。

一般に、我々が持っている知識は命題の形で表現される。例えば、「A企業の純資産はB企業のそれより大きい」、「A企業の純利益はC企業のそ

れより多い」あるいは、「A企業の保有する土地は含みが大きい」等である。この場合、これら文章を理解するためには「企業」「純資産」「純利益」「土地」「含み」さらには「多い」「大きい」「保有する」といった「ことば (word)」の意味を理解しなければならない。その際、われわれは常識的にこれらことばが現実を忠実に描写していると考えている。つまり、すでに分節化された「対象世界」がわれわれ主体を離れて客観的に存在し、ことばはそれらに一对一に対応する形で貼り付けられるラベルのような存在として捉えられているものと見られる⁽⁴⁾。

本稿は、「写実的描写性」の考え方がことばの意味の一定の捉え方から生じていると考える。以下では、財務諸表の例えば「土地」や「資産」ということばに「写実的描写性」の考え（常識的言語観）が生ずる根拠をことばの意味の検討を通じて明らかにしたい⁽⁵⁾。

(2) 指示対象としての会計上のことばの意味

「会計上のことばは現実を写実的に描写している」（写実的描写性）という考え方を基礎とする会計の意味論的リアリズムにおいては、ことばの意味を記号とその指示対象との二項関係によって捉えていると見られる。つまり、ことばの意味はそれが言及する「対象世界」の側から与えられるものと考えている⁽⁶⁾。

例えば、A社が東京都千代田区富士見2丁目17-1の土地100㎡を現金10,000万円で購入したと仮定しよう。A社における仕訳は、次のように表される。すなわち、(借方)土地 10,000万円 (貸方)現金 10,000万円である。その際、もし取引を記録する会計担当者が千代田区富士見2丁目17-1の土地を知っていれば、「ああ…あの外堀に面した緑の多い所か…」と自分が実際過去に見たその場所を心の中に思い浮かべるかもしれない。この場合、彼にとってことば「土地」は特定の場所、唯一の対象を意味しているものと考えられる。つまり、このことばの意味は、特定の指示対象物として捉えられていると言えよう⁽⁷⁾。

これに対して、上記会計担当者の手を離れた帳簿上および貸借対照表の一般名辞としての「土地」勘定の場合においては、このことばの意味はもは

や「あの都心の外堀に面した所」というように唯一の対象物として捉えられるとは言えなくなる。つまり、帳簿および貸借対照表上の「土地」勘定には、富士見2丁目17-1以外の場所に原野、山林、あるいは商業用地等様々な形で保有されているA社の「土地」すべてが集計されているかもしれないからである。「土地」に限らず例えば、「有価証券」「棚卸資産」あるいは「固定資産」といった財務諸表上の一般名辞は、固有名詞のように特定の場所や特定の具体的な性質をもつ個物つまり唯一の対象に適用されるのではなく一般的な適用性を持っている。それでは、帳簿上および貸借対照表上の一般名辞としての「土地」や「資産」の意味は、どのように捉えられるのか、あるいは捉えられると考えるのであろうか。

(3) 会計上のことばの一般的適用性と抽象作用

財務諸表上の各用語、例えば「土地」「建物」「商品」「有価証券」等の一般名辞の場合、前述のごとく会計上のことばの「写実的描写性」を基礎とする会計の意味論的リアリズムにおいては、人が心の中で思い浮かべる概念として意味を捉えていると考えられる⁽⁸⁾。例えば、A社の貸借対照表の「土地」勘定は、富士見2丁目17-1の商業用地と他の場所の山林および原野を含んでいると仮定してみよう。この場合、我々が三者に「土地」という同じことばを適用し貸借対照表上の「土地」勘定に集計できるのは、言わば「土地性」とでもいえるそれらに共通の性質（概念）を経験的に持っているからだと説明される⁽⁹⁾。

つまり、商業用地、山林および原野の三者は、各々広さ、地質、形状、海拔あるいは立地条件や所在地等において異なった特徴を持っているが、いずれにも「土地性」とも言えるような、共通性質があり、我々は精神作用により、その特定の共通性質（土地性あるいは土地概念）を抽象しその他の性質をすべて捨象して（抽象作用）、「土地」ということばを適用する⁽¹⁰⁾。また同様に、我々は上記の「土地」を始めとして「現金預金」「有価証券」「棚卸資産」「開発費」等に対して「資産」ということばを適用する。それができるのは、抽象作用により「資産性」とでも呼べるような共通性質すなわち資産概念を抽象し、それに基づいて

「資産」ということばを適用するからであると説明される。

従って、個々の対象から心の中で抽象作用により獲得された共通性質（概念）がことばの意味となる。共通性質としての特定の概念は、外界の実在によって我々の心に産み出された一段高い抽象であるが、その機能は事物の実在的な類似性を反映している。この点において我々の言葉は「実在的」であるとされるのである⁽¹⁾。

会計の意味論的リアリズムあるいは写像理論的考え方の成立基盤と見られる「写實的描写性」は、以上のようなことばの意味の捉え方を根拠としているものとする。またそれが、会計に限らず我々の日常生活における常識的な言語観でもあるのである。

3. 会計の意味論的リアリズムの破綻

前節で見たように、会計の意味論的リアリズムあるいは写像理論的考え方の基礎には、「会計上のことばあるいは財務諸表上の各用語は現実の写實的描写である」という考えが存すると見られる。そして、この「写實的描写性」は、記号と指示対象との二項関係に基づいて捉えられている意味すなわち指示対象物あるいは概念としての意味から生ずると考えられる。ところが、意味を特定の指示対象物として捉えると、ことばの一般的適用性を説明できない。この一般的適用性の問題の解決を、抽象作用という心的過程に求めたのが概念として意味を捉える考え方であった。その作用を介して、ことばの意味はそれが言及する「対象世界」の側から与えられる。

本節では、会計上のことばの個別的对象への適用過程と概念それ自体の形成・再構成の過程との違いを強調して、「写實的描写性」の根拠となっている抽象作用に基づく「概念としての意味」をとりわけ概念の形成過程に焦点を当てて再検討してみたい。

(1) 会計上のことばの個別的对象への適用過程

ことばの個別的对象への適用は、我々が会計職業の世界で経験的に有する概念（共通性質）に基づいているように見える。例えば、A社の取得し

た商業用地に「土地」ということばを適用し土地勘定に集計できるのは、会計担当者の有する会計上の土地概念を基準にしてその取引対象に共通性質（土地性）を見い出しているからである。A社の山林や原野に同じ「土地」ということばを適用し、土地勘定に集計できるのも同様である。このように、会計上A社の取引対象に対する「土地」ということばの適用可能性および土地勘定への集計可能性は、会計スタッフの持っている土地概念を基準にしてその対象に共通性質（土地性）が存するか否かによって決まる。その際、抽象作用が重要な働きをすることは前述のごとくである。

また、「土地」勘定はさらに貸借対照表上「資産」項目として分類され、借方に記載・集計される。それが可能であるのは、会計担当者が会計職業の世界で経験的に持っている資産概念を基準にして抽象作用により、例えば資産性といった共通性質を「土地」に見い出すからである。土地の取得のケース以外でも、例えば「NEC」の株式を1万株取得したとする。その場合、まず、会計担当者の有する会計上の株式概念を基準に「株式」ということばが適用される。次に、有価証券概念に基づいて「有価証券」ということばの適用の可否が検討され、共通性質が見い出されるとそのことばが適用可能となり「有価証券」勘定に集計される。そして、最終的には資産概念を基準として「資産」ということばが適用され、帳簿上および貸借対照表上資産項目に分類するのである。我々は、一般に、このような精神的作業を瞬時に行っていると見えよう⁽²⁾。

以上のごとく、会計上、ある取引対象に対する特定の事情の適用可能性および特定の勘定・項目への分類・集計可能性は、会計スタッフが会計職業の世界で経験的に有する概念を基準に抽象作用によって行われると常識的に考えられている。しかし、抽象作用を介して会計上のことばを個別的对象に適用する過程の説明は、ことばの既存の適用に関する限り我々にとって特に不都合を生ぜしめず、言わば無害である。それでは何が問題となるのであろうか。本稿は、ことばの個別的对象への適用基準である「概念」自体がいかにして獲得されるかという概念形成の過程に問題が存していると考えられる⁽³⁾。以下では、抽象作用に基づく概

念の形成過程を検討する。

(2) 概念の形成過程

多くの直接所与〔 a_1, a_2, a_3, \dots 〕から、心的過程たる抽象作用により共通性質が抽出され、それにより特定の概念が形成される。従って、概念は外界の実在によって我々の心に産み出されたものであると考えられる。意味を概念として捉える考え方においては、この点にことばの「写実的描写性」の根拠を求めることができる。これが、抽象作用に基づいた概念として意味を捉える考え方であった。しかし、ここで直接所与として挙げること自体、我々はすでに特定の概念を用いてそれらを分類しているのではないかと、という疑問が生ずる。つまり、よく考えてみると、概念形成にあたって抽象作用により選別されるというその特徴の何であるかがすでに確定していなければ、直接所与として限定することができないのである⁽¹⁰⁾。

例えば、「土地」概念は a_1, a_2, a_3, \dots 、 a_i 等様々な直接所与から、共通性質を抽出することによって形成されると考える場合、我々が抽象作用の対象となる直接所与を限定すること自体、抽象によって選別されるはずの「土地」概念を用いてすでにそれらを分類していると言えるのではないだろうか。つまり、土地概念の形成にあたって抽象作用により選別されるというその特徴の何かがすでに確定していなければならず、それを確定するためには「土地」ということばを用いることが必要となる。従って、抽象の結果としてはじめて成立するはずの「土地」概念を抽象に先立って実際に適用しなければならない。言わば、「土地」概念の抽出される直接所与を、我々はすでにその「土地」概念によって抑えているのである。

また、資産概念の形成についても同様のことが言える。たしかに、会計職業の世界においては、前述のごとく現金、預金、売掛金、受取手形、有価証券、棚卸資産、建物、土地等個別の対象に対する「資産」ということばの適用は、我々が経験的に有する共通性質としての「資産概念」に基づいているように見える。しかし、資産概念それ自体は、それら直接所与から抽象作用という心的過程をへてはじめて獲得されるというよりは、むしろ、

実際の資産概念の形成過程においては、我々は会計実践で直接所与をすでに「資産」として分類されたものとして受け入れていると考えた方が現実妥当性を持っている。すなわち、上記の項目をあらかじめ「資産」概念の実例として認めるのでない限り、直接所与の系列を資産概念がまさにそこから抽象されるべき基盤として立てることはできない。というのも、この場合、「資産」の概念ではなく例えば「大きさ」「広さ」「硬度」あるいは「色」の概念等の物理的特徴やその他の経済的特徴を問題にしているかもしれないからである。

(3) 概念の再構成過程

さらに、ことばの既存の適用から新しい適用が生ずる時に概念自体が変わることがある。抽象作用に基づく考え方では、この現象を十分納得できるかたちで説明できない。

例えば、「資産」概念は、実務の世界はともかく少なくとも会計研究者の世界においては、変化してきていることは周知の事実である。すなわち、繰延資産や前払費用が借方資産計上される時代ではそれまでの「財産価値」から「用役潜在力」へ、最近のように今までになかった新しい取引形態が一般的になってくると「用役潜在力」からさらに新しい資産概念に移る傾向が見られる⁽¹¹⁾。抽象作用に基づく概念形成の立場からは、それまで共通性質とされていたものが実は誤ったものであり、科学の発達により新たに共通性質が発見されたため新概念が形成（再構成）されるのだ、というようにこの現象を説明するであろう⁽¹²⁾。

しかし、上記の現象の場合、未発見の真の共通性質が発見され新しい概念に基づいて特定の対象に「資産」ということばが新たに適用される、というよりはむしろ、われわれ実践上の様々な理由からある対象を新たに借方資産計上する必要性が生じ、そのようにしてあらかじめ分類された資産項目から特定の共通性質を抽出している、と言った方がこの現象を説明する上では説得力がある。すなわち、それまで、「資産」ということばが適用されていなかった特定の対象が、新たに発見された真の概念に基づいて新しく資産分類されるのではなく、対象とは関係なく使用者側の実践上の必要性から借方資産計上され「資産」ということ

ばが新たに適用されることとなったのである。その結果、それまでの概念が再構成されると見られるのである。

以上見てきたように、「資産」を例にとれば、我々は、特定の直接所与から抽象作用により「資産」概念を抽出しそれに基づいて個別的对象に「資産」ということばを適用している、というよりはむしろ、直接所与を資産としてすでに分類されたものとして受け入れていると考えられる。そのように考えないと概念の再構成の現象も十分に説明できない。その結果、概念が抽象作用に基づいて外界の実在によって我々の心に産み出されたものであるという考えは必ずしも現実を適切に説明しているとは言えず、また、ことばの「写実的描写性」も十分な根拠を持たないものとなる。従って、会計職業の世界における会計の意味論的リアリズムあるいは写像理論的考え方は、我々の日常生活における常識的言語観と同様に説得力ある成立基盤を欠いたものと見られるのである。

それでは、日常のことばをはじめとして会計上のことばの意味はどのように捉えられるのであろうか。ことばの意味を、抽象作用という人間の精神過程に求めるのではなく、非心理主義的なことばの「使用」あるいは「使用条件」として捉えるのが前稿で展開した「言語ゲーム」の考え方である⁽⁹⁾。

4. 言語ゲームとしての会計

(1) 言語ゲームの考え方

「言語ゲーム (language-game)」の考え方についてはすでに前稿において説明しているところであるが、本稿ではこれまで展開した事柄との関連で重要な点だけを以下で取り上げ、会計上のことばの意味を再検討したい⁽¹⁰⁾。

まず、言語ゲームの考え方に基づくことばの意味の捉え方を、将棋の例を使って再度説明しよう。将棋の「王」「金」「銀」「歩」等の駒のことばの意味は、どのように捉えられるのであろうか。我々は、例えばことば「歩」の意味を、前の方向に一つずつ進むことができるという条件として捉えていると言えよう。つまり、その意味は駒の進め方によって与えられ、その対象から生ずるのではな

い。

従って、駒のことばの意味を知る上では対象の物理的性質は一切問題にならない。また、将棋のゲームのない文化圏の人々がいくら駒を凝視したところで、あるいはあらゆる科学的手段を用いて科学的に分析したところで、その意味が理解できるものではない。「王」や「金」といったことばの意味を理解するためには、何が意味あることで何が意味のないことかをしらなければならない⁽¹¹⁾。そのためには、将棋のルールを誰かに教えてもらう必要があるのである。将棋のルールに基づく駒のことばの使用あるいは使用条件、これがそのことばの意味である。そして将棋というゲームは、そのルールに基づいて成立しそれ自体特有の意味領域を持つ一種の言語ゲームとされる。ことばの意味のこうした捉え方は、現実にも最もよく適合していると見られ、今日、最有力かつ説得力ある考え方となっている⁽¹²⁾。

(2) 言語ゲームの考え方に基づく会計上のことばの意味

会計上のことばも同様である。会計を一種の言語ゲームと考えると、会計上のことばの意味はこれまで展開した抽象作用に基づく概念としてではなく、ことばの使用あるいは使用条件として捉えられる。すなわち、会計上のことばの意味はそれが言及する「対象世界」の側から与えられるのではなく、それを行使する主体あるいは行使のメカニズムそのものによって与えられることになる⁽¹³⁾。例えば前稿でも述べたとおり、不動産販売業では会計上「棚卸資産」とされる土地がそれ以外の業種では一般に「固定資産」とされる。そこでは、各々のことばの意味は「対象」から生じているというよりは、これらことばを使用する主体の側から使用のメカニズムを通じて与えられると言えよう。

つまりこの場合、「棚卸資産」ということばは、土地を主たる営業活動において継続的販売に供するという条件を満たす時に用いられ、このことばの使用条件が意味となる。これに対して、ことば「固定資産」は、土地を企業内で長期間にわたり収益獲得活動のために利用するという条件を満たす時に用いられ、このことばの使用条件が意味と

なる。対象をいくら科学的かつ詳細に分析したところで、「棚卸資産」や「固定資産」の**ことば**の意味を見いだすことはできない。その意味を理解するためには、いかなる条件のもとで**ことば**が用いられるのか、つまり会計という有意味な体系（一つの言語ゲーム）を作り上げている会計上のルールを知らなければならない。このことは、会計上の他の**ことば**についても言えることである。

ところで、**ことば**の意味を決定する使用あるいは使用条件は、基本的には**ことば**の使用主体との関連で捉えられるものであるが、現実の社会制度としての会計においては、全体として我々会計職業の世界で慣行化された社会的ルールによっていることは前稿で指摘したとおりである⁽²²⁾。また見方を変えれば、我々が常識的に会計上の**ことば**に写実的描写性を感じるのには、我々が共有している会計上のルールの社会性に原因していると言えるのである⁽²³⁾。

(3) 「概念」から「使用条件」へ

それでは、**ことば**の意味をその使用あるいは使用条件として捉えるならば、前述の抽象作用に基づく概念形成・再構成の過程で指摘した問題ほどのように説明されるであろうか。

例えば会計上「土地」という**ことば**は多くの直接所与 $a_1, a_2, a_3, \dots, a_n$ から抽象作用により共通性質が抽出されそれに基づいて**ことば**「土地」が適用されるのではなく、「土地」という**ことば**をすでに一定のクラスに属する対象に適用可能なものとして受け入れることによって習得する、と説明される。つまり、対象である直接所与に土地性といった共通の性質が見い出され、それに基づいて「土地」という**ことば**を適用し土地として分類するのではなく、一定のクラスに「土地」という同一の**ことば**を使用するからそれらが「土地」として分類されるのである。そこでは、土地概念と言われていたものは「土地」という**ことば**の使用条件として捉えられる。

また、資産概念の再構成過程も同様に説明される。すなわち、資産概念と呼ばれているものは、実は「資産」という**ことば**の使用条件であり、資産概念の変化は「資産」という**ことば**の使用条件の変化の過程として捉えられる。従って、それま

で「資産」という**ことば**が適用されていなかった特定の**ことば**が、新たに発見された真の概念（概念の再構成）によって新しく資産分類されるのではなく、様々な必要性から特定の**ことば**にも「資産」という**ことば**を用いるようになったため「資産」として分類するのである。従って、新たな**ことば**に対して「資産」という**ことば**の使用が先行し、それにより**ことば**の使用条件が変わると説明されるのである。**ことば**の新たな使用は、新しい言語ゲーム（一つの有意味な**ことば**の体系）を成立させる。

このように、まず「土地」や「資産」という**ことば**の使用が先にあってそれから個々に共通の使用条件が求められる。この**ことば**の「使用条件」を我々は「概念」と呼んでいるものと見られる。しかし、「概念」は対象から生ずるが、「使用条件」は**ことば**の使用主体から付与されるものである。この点に重要な違いがある。このように考えると、前節で指摘した問題点は抽象作用に基づいた説明より納得のいく形で説明可能である。

5. むすび

以上、本稿は会計プロセスである経済活動とアウトプットたる財務諸表との関係について、会計研究者の間で常識的に受け入れられている考え方を検討した。すなわち、「会計は経済活動を財務諸表にありのままに写像する」あるいは「会計はカメラで風景を撮るがごとく経済活動を財務諸表に忠実かつ客観的に描写する」という表現に見られる考え方であり、本稿では「会計の意味論的リアリズム」と呼んだ。

この会計の意味論的リアリズムは、会計上の**ことば**が現実を写実的に描写しているという考え方を基礎としており、この写実的描写性はさらに抽象作用という心的過程に基づく概念としての意味を根拠にしているものと見られた。その場合、会計上の**ことば**の意味は、「対象世界」から抽象によって我々の心に産み出された共通性質たる概念として捉えられており、それにより、**ことば**は事物の実在的な類似性を反映すると考えられた。このような考え方が、会計上の**ことば**の写実的描写性さらには会計の意味論的リアリズムを成立させる基盤になっている。しかし、抽象作用に基づく

概念として意味を捉える考え方は、概念自体の形成・再構成過程の説明において問題点のあることは本稿で指摘したとおりである。

そこで、会計を言語ゲームと考え、会計上のことばの意味をその使用あるいは使用条件として捉えるならば、問題となった点に対してより説得力ある説明が可能となった。その場合、会計上のことばの意味はその対象から生ずるのではなく、ことばの使用主体が使用のメカニズムを通じて意味を付与するものと考えられる。従って、今日、ことばの意味に関して最も説得力ある「使用」あるいは「使用条件」として会計上のことばの意味を捉えると、会計上のことばの写実的描写性さらには会計の意味論的リアリズムは必ずしも現実を適切に表現しているとは言えないと考えられるのである。

〔注〕

- (1) 本稿は会計の「写実性」あるいは「写実的描写性」を特に問題とするため、以下では「会計の意味論的リアリズム」という表現を用いる。もちろん、この用語は会計研究者の間で一般に用いられているものではない。
- (2) いわゆる会計上の「測定」の問題がこれである。しかし、会計の対象となる会計事実は会計という一つの「解釈体系」を離れて客観的に存在するのではなく、それが作り出しているということが、永野則雄稿「会計事実の構築」『経営志林』第26巻第1号、1989年4月、109—123頁で指摘されている。筆者も同じ考えであり、永野稿に言う「解釈体系」は本稿の「言語ゲーム」に相当する。また、経営情報論の分野で、遠田雄志著『あいまいだからおもしろい』有斐閣1985年も、例えば「情報のほとんどは言語というシンボルによって伝えられるが、言語の魔力はやがて客観的現実を凌駕するシンボルの殿堂を築き上げる。そこでは、豊かな幻影が貧しい事実を圧倒する。」(16頁)、というように基本的に同じ立場をとっていると思われる。
- (3) 例えば、「机」ということばが机を、ことば「エンピツ」がエンピツというものを指していると我々は常識的に信じている。そこでは、ことばの
- 対象が我々認識主体を離れてすでに客観的に存在しており、ことばはそれを忠実に写し出しているのだという考えが前提となっている。本稿は、この考えを会計という一つの「言語体系」におき直し、それをことばの「写実的描写性」と呼んで、意味の検討を通じてその考え方が必ずしも現実に妥当しないことを明らかにするものである。
- (4) 菅豊彦著『経験の可能性—ウィトゲンシュタインと知の基盤—』法律文化社、1988年、91頁。
- (5) ことばの意味については特に次の文献に基づいている。菅豊彦著、前掲書。唐須教光著『文化の言語学』勁草書房、1988年。黒田亘著『経験と言語』東京大学出版会、1984年。橋爪大三郎著『言語ゲームと社会理論』勁草書房、1986年。池上嘉彦著『意味論』大修館書店、1983年。Bloor, D., *Wittgenstein, A Social Theory of Knowledge*, 1983, 戸田山和久訳『ヴィトゲンシュタイン: 知識の社会理論』勁草書房、1988年。Hospers, J., *An Introduction to Philosophical Analysis*, 1967, 斎藤哲郎監修『J. ホスパーズ 分析哲学入門1 意味論』法政大学出版局、1983年、同監修『J. ホスパーズ 分析哲学入門2 認識論』法政大学出版局、1974年。その他の参考文献は末尾に掲げている。
- (6) 長く西洋の思想を支配してきた考え方であって、J. ロックの言語観に代表される伝統的な言語の見方である(菅豊彦著、前掲書、77—85頁)。
- (7) この見方は固有名詞のケースに最もよくあてはまる。
- (8) 常識的な言語観であり、J. ロックは「概念」の代りに「観念 (idea)」という語を用いた(前掲、Hospers, J. *op. cit.*, 斎藤哲郎監修『J. ホスパーズ 分析哲学入門2 認識論』4頁)。
- (9) この点については、菅豊彦著、前掲書、79—85頁、および黒田亘著、前掲書、64—86頁、を参照。
- (10) J. ロックの「抽象理論 (abstraction theory)」に基づく考え方である。
- (11) 菅豊彦著、前掲書、84頁。
- (12) もっとも、「土地」や「株式」のケースは「有価証券」や「資産」と違い、日常のことばという最も基本的な言語体系(一つの解釈体系あるいは言語ゲーム)と会計という特有の意味領域を持つ

言語体系（一つの解釈体系あるいは言語ゲーム）との間には重大な差異は見られないように思われる。

- (13) この点については、とりわけ、黒田亘著、前掲書、75—81頁、を参考にした。
- (14) 言語と世界を写像関係で捉えていると常識的に考えられている「直示的定義」の場合でさえ、その実行に先立って何を定義しようとしているかについて合意なり了解なりがあらかじめ成立していなければならない。例えば、あるものを指で指しながら「このもの」と言う場合、何を指しているのか、「形」か、「色」あるいは「用途」か、があらかじめわかっていることが必要である（橋爪大三郎著、前掲書、27頁）。
- (15) 例えば、『企業会計』第40巻第10号（1988年10月）における資産概念についての特集を参照。
- (16) Bloor, D. *op. cit.*, 戸田山和久訳、前掲書、52—60頁参照。
- (17) 拙稿「会計と言語ゲーム」『経営志林』法政大学経営学会、第25巻第4号（1989年1月）、参照。
- (18) 言語ゲーム論については主として次の文献を参考にした。菅豊彦著、前掲書。橋爪大三郎著、前掲書。Bloor, D., *op. cit.*, 戸田山和久訳、前掲書。
- (19) 例えば、野球を知らない人がいくら試合を細かく記述しても、野球というゲームの記述にならない。バントをした選手がどの位のスピードで一塁に走ったとか、足からすべり込んだといったことは全く問題にならないのである。つまり、野球のルールに従ってどのような解釈が与えられているか、ということが重要なのであって物理的特性が重要なのではない（唐須教光著、前掲著、96—97頁）。
- (20) 唐須教光著、前掲書、47頁。また、池上嘉彦著、前掲書、70—77頁および Hospers, J., *op. cit.*, 斎藤哲郎監修、前掲書、36—44頁、参照。
- (21) 橋爪大三郎著、前掲書、30頁、参照。
- (22) 拙稿、前掲稿、91—92頁、参照。
- (23) 我々が共有する会計ルールの社会性は、会計

上のことばの「写實的描写性」のみならず対象の「客観性」といった感覚を産み出す原因と思われる。これらの点の考察は別稿に譲りたい。

【参考文献】

1. 菅豊彦著『経験の可能性—ウィトゲンシュタインと知の基盤—』法律文化社、1988年。
2. 唐須教光著『文化の言語学』勁草書房、1988年。
3. 黒田亘著『経験と言語』東京大学出版会、1984年。
4. ———『知識と行為』東京大学出版会、1983年。
5. 池上嘉彦著『意味論』大修館書店、1983年。
6. ———『記号論への招待』岩波書店、1985年。
7. ———『意味の世界』NHKブックス、1987年。
8. Hospers, J., *An Introduction to Philosophical Analysis*, 1967, 斎藤哲郎監修『J. ホスパーズ 分析哲学入門1 意味論』法政大学出版局、1983年。
9. ———『J. ホスパーズ 分析哲学入門2 認識論』法政大学出版局、1974年。
10. Bloor, D., *Wittgenstein, A Social Theory of Knowledge*, 1983, 戸田山和久訳『ウィトゲンシュタイン:知識の社会理論』勁草書房、1988年。
11. Langer, S., K., *Philosophy in a New Key*, 1957, 矢野萬里・池上保太・貴志謙二・近藤洋逸訳『S. K. ランガー シンボルの哲学』岩波書店、1984年。
12. 橋元良明著『背理のコミュニケーション』勁草書房、1989年。
13. Winch, P., *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, 1958, 森川貞規雄訳『社会科学の理念』新曜社、1985年。
14. Berger, P., L., Luckmann, T., *The Social Construction of Reality*, 1966, 山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社、1985年。